地理歴史科「日本史Ｂ」学習指導案

学　校　名：鹿児島県立松陽高等学校
授業年日時：平成 23 年 11 月 8 日（火）６校時
対 象 学 級：２年生文系
使 用 教 室：２年２組
授　業　者：二宮勇貴
教　科　書：「詳説・日本史Ｂ」（山川出版社）
副　教　材：「新日本史要点ノート」（啓隆社）
「新詳日本史」（浜島書店）

1　単元名　「院政と平氏の台頭」
院政と武士の成長

2　教材観
平安時代末の院政期には、これまでの律令体制が崩壊し、権力の分化や社会を実力で動かそうとする風潮が強まった。このような社会状況から徐々に政治的な発言力を武士が高めていく。院政の政治機構や当時の社会について学ぶことで、中世社会の情勢を的確に捉えさせ、次時の保元・平治の乱、平氏の台頭など武士の中央政界進出へとつなげていきたい。

3　生徒観
文系の日本史選択者が集まったクラスである。授業には真面目に取り組む生徒が大多数だが、歴史を苦手としている生徒も数名いる。本時の授業内容を通して歴史の大きな変化、枠組みを捉えさせることで、少しでも苦手意識の解消に努めたい。

4　本時の目標
(1)　院政によって摂関家の勢力が後退し、上皇による慣習にとらわれない政治が行われるようになったことを理解する。
(2)　僧兵の強訴や武士の中央政界への進出から、中世の社会では実力によって社会を動かす風潮が強まっていることを理解する。
(3)　愚管抄の史料から、武士の力によって政治が左右される時代へと変化していくことを読み取る。

5　本時の展開

時間	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入 6分	①院政の始まり ・退位した上皇が天皇に代わって政治を行う院政によって、摂関から政治の実権が失われていく。	・「院政」という語句の意味を確認する。 ・院政の概念を理解する。	・「院政」「上皇」などの基本的な歴史用語と、院政が持つ歴史的な意義を確認させる。
展開 40分	②院政の政治機構と財政基盤 ・上皇（院）が強力な権限を握り、慣例に縛られない政治が行われた。 ・知行国や広大な荘園などが院政の財政基盤となった。 ③院政と宗教 ・上皇らは仏教を厚く信仰した。また出家し法皇となることで、大寺院へも影響力を行使しようとした。 ・大寺院は過大な要求を朝廷につきつけた。（僧兵の強訴） ④武士の中央政界進出 ・天皇や貴族の護衛を務める中で武士が中央政界へ進出していくことになる。 ⑤地方武士の成長 ・地方では武士の舘が築かれ、舘を中心に武士が地方社会の担い手となっていく。	・上皇の政治の有り方や僧兵の強訴とこれを取り締まる武士の存在などから、法によらず実力で争うという院政期の社会の特色を理解する。 ・熊野詣や高野詣、六勝寺の建造などから、院政と宗教界のつながりの深さを理解する。 ・清和源氏と桓武平氏（伊勢平氏）の二大勢力の当時の中心人物を確認する。 ・奥州藤原氏の存在から地方における武士勢力の強大化を理解する。	・院政期には荘園に対する権力の強化が進み、より私的な土地支配が行われたことを理解させる。 ・「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されていることを取り上げて、神仏習合や当時の宗教界で重要な位置を占めていたことを印象付ける。 ・白河上皇の「天下三不如意」の語を用いて、当時の朝廷が僧兵の強訴に頭を悩ませていたことを印象付ける。 ・「平泉 - 仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界遺産に登録されたことをとりあげ、当時の社会で広く権力が分化していたことを理解させる。
まとめ 4分	⑤保元の乱（次時の導入） ・武士の力が政治を左右することになり、結果として「武者の世」を招くことになる。	・愚管抄の史料を読み取る。	・愚管抄の著者を確認する。（前時の内容の確認）

6　評価

(1)　院政の仕組みや意義を理解することができたか。

(2)　僧兵の強訴や武士の中央政界への進出から中世社会の特徴を理解することができたか。

(3)　史料を正確に読み取ることができたか。